

『アメリカ大手銀行グループの業務展開』の研究とその舞台裏



松山大学経済学部教授 掛下 達郎氏 1989(平成元)年卒 1991(平成3)年博士入 日本経済評論社 2016年3月刊行

一昨年、2015年の学位論文を基に上記の著書を出版させていただきました。これは大学院時代からの研究を纏めたもので、私の研究生活のおそらく前半を総括するものです。主査の川波洋一先生、副査の稲富信博先生、岩田健治先生にはこの場を借りて深く感謝いたします。なお、本書は公益財団法人日本証券奨学財団の研究出版助成を受けています。

本書の内容は、米銀大手の業務展開を掘り下げたもので以下のような章立てになっています。

第1部 業務展開の基礎構造

第1章 短期金融市場の展開：銀行流動性から証券決済へ

第2章 ノン・リコース・ファイナンスの展開：証券化の現代的基礎手法

第2部 業務展開の特質：OTDモデルの形成

第3章 証券化前史：ローン・セール

第4章 リスクの切り出し：ディリバティブ

第5章 大手商業銀行グループの証券化業務への進出

第3部 収益構造とその源泉

第6章 OTDモデルの収益構造：業務展開の帰結

第7章 OTDモデルの収益の源泉：大手商業銀行グループの優位性

改めて眺めてみても、本書は研究を始めた大学院時代には思い付きもしなかった内容になっています。私の研究の原点は、昨秋永逝された深町郁彌先生のゼミナールにあります。先生から学んだことは沢山ありますが本当に自由に研究させてもらったと感じています。これは現在の私の研究活動にも生きています。

九州大学を出て5年後の1999年から、米国ノートルダム大学とマサチューセッツ大学に留学させてもらいましたが、自由闊達な深町先生のゼミのおかげでM.H.ウォルフソンやJ.R.クロッチェイをはじめとする先生方から学ぶことができました。アメリカ研究をしている者として、若い時にアメリカの大学院で学べたことは私の財産になっています。このとき、ディムスキ・エプシュタイン・ポーリン編『アメリカ金融システムの転換』（ポスト・ケインジアン叢書30）の翻訳にたずさわっています。

その後、帰国後に『証券経済学会年報』に書いた論文が縁で、金融庁に呼ばれてシンポジウムで報告をしました。また、日本銀行や公益財団法人日本証券経済研究所に出入りするようになり、同研究所の佐賀卓雄先生の調査に同行しワシントンD.C.とニューヨークの規制当局と金融機関にも連れていってもらいました。留学中は大学の研究者のヒアリングに行くことはありましたが、実務家や規制当局の方々からお話を伺うことはこの時に学びました。この経験によって、文献調査だけではなく、現場の方々

から学ぶことの意義に気付かされました。また、同研究所には私の研究を実務家の方々の前で報告する機会をいただき、現場の方々の感覚を学ぶことができました。同研究所からは『証券レビュー』の講演録、『証券経済研究』の論文、多数の分担執筆をさせていただき、その内容は本書に活かされています。

同じ頃、東京大学の渋谷博史先生に呼ばれて、『アメリカ・モデルの企業と金融』の分担執筆と、駒場の教養学部の講義をさせていただきました。また、神戸大学の佐藤隆広先生の国際金融・開発経済研究会や恩師の川波先生の九州大学マネタリーカンファレンスに参加するようになったのもこの頃です。これらの内容も本書に収録されています。

また、出入りしている日本証券経済研究所が証券経済学会の事務局をしている関係で、2009年に同学会を勤務する松山大学で開催することになり、上海証券取引所の副総裁をお招きして特別講演をお願いしました。このとき、日本銀行をはじめとする方々にも報告していただきました。この学会には、恩師である深町先生も討論者として参加され、奥様ともご一緒に食事をさせていただきました。その後、北京の対外経済貿易大学でシンポジウムを開催しました。こうした中国との関係は深町先生とその教え子である留学生が早くから築かれていたものです。

もう一人の恩師である川波先生には『有斐閣経済辞典』や『現代金融論(新版)』に、証券経済学会と日本証券経済研究所には『証券事典』に執筆させていただきました。ご高著の書評を学会誌、学術誌に依頼していただいた先生方にも研究の視野を拡げていただきました。本当にたくさんの先生方に支えられて本書は成り立っています。

2011年から日本銀行松山支店長を囲んで松山大学金融研究会も始め、現在で支店長は5人目で26回開催しています。支店長と地元の研究者・実務家を中心に立ち上げたのですが、最近は関東や関西の先生方にも報告をお願いするようになりました。この研究会によって、地方に居ながらも研究のモチベーションを高め保つことができ、同時に日銀のネットワークで海外の調査先までお願いをしており、私ども地方の研究者には大変有難いものになっています。

JSPS 科学研究費を取得してからは、海外調査は香港、上海、シンガポール、北京、シカゴにまで足を延ばすようになりました。昨春にはワシントン D.C.の FRB、IMF、世界銀行グループで調査ができました。今夏にはロンドンの金融街シティの BOE と金融庁を訪問してきました。本書でアメリカ研究に一区切りを付け、英米大手銀行の比較研究に入ろうとしています。そのため、今後ロンドン調査を開始し継続していこうと考えています。英米は、同じくアングロサクソン型モデルもしくは資本市場中心の金融システムと呼ばれていますが、両国の金融システムの実態はかなり異なります。それは、投資銀行業務の盛衰の違い、リテールバンキングの重心の違い、抱き合わせ取引の組み合わせの違いです。この違いをもたらしている要因やこの違いがもたらす結果には興味深いものがあります。伝統と格式を重んじるイギリスと創造と変革を志向するアメリカの国民性の違いが金融面にも表れているように感じます。こうした研究を今後も続けていき、また著作を発表できれば大変な喜びだと考えています。